

2. 海外滞在経験者の事例研究

—— 海外滞在経験と思考・行動の関連性の検討 ——

石川久美

【抄録】 近年、海外で滞在した経験のある生徒が増加している。これらの生徒に対してどのように対応していったらよいのであろうか。今後の指導の手がかりを得るために高校在学中に留学した生徒および帰国子女の思考や行動を観察した。ここでは、5名の生徒の事例について紹介する。

【キーワード】 海外滞在経験、留学、帰国子女

【研究のねらい】

ここ数年、毎年、海外の高校へ留学する生徒がいる。平成2年度の担任学年である高校3年生（129人）だけでも、一年間の留学から戻って復学した生徒が4名いた。このなかで3名は、休学することなく留学し、留学先の高校の単位を本校の単位として認めた。また、親の仕事の都合で1年以上海外に滞在した生徒が4名いた。これらの生徒において、海外に滞在した経験がどのようにその考え方、友人関係、進路選択などに影響をおよぼしているかを考察した。

かれらの中には、海外滞在経験が影響を及ぼしていると考えられるような言動を示す生徒もいる。本校は少人数の学校であることもあって、一人の生徒と教師との接触の機会が多い。この点を生かして、対象生徒の思考や行動を多角的にとらえるよう心がけた。

今後も高校生の留学経験者や帰国子女は増えていくものと思われるが、それらの生徒に対してどのように対応していったらよいのであろうか。海外滞在経験のある生徒の事例を具体的に考察することにより海外滞在経験の意味を考え、今後の留学経験者、帰国子女および、留学希望者の指導に生かしていきたい。

【海外滞在経験のある生徒の事例】

①男子

(滞在先) ドイツ

(滞在時期) 0才から14才

(渡航理由) ドイツで生まれた。

(学校の授業内容)

「幼稚園まではドイツ人と同じ幼稚園に通った。

小学校からは、日本人学校（小・中合同）週休2日だが、7時間授業などが数日あったため、授業数は日本とほとんど同じ。科目は小・中とも日本と同じだがドイツ語と英会話（中学のみ）があった。

(印象に残ったこと)

学校生活：「ドイツ人の友人と一緒に遊んだのは幼稚

園の時だけだった。

学校は校則がなかったのでのびのびしていた。」

全般について：「外国人は自分の意見を大切にする。

ドイツの人が議論をすると、お互いに意見を曲げなかった。」

(滞在中に困ったこと)「14年もいたので現地人とほとんど同じ生活をしていたため、日本のことがよくわからなかった。」

(外国人から見た日本をどのように感じたか)

「享楽的な要素がたくさんある所だと思った。」

(日本と滞在国の比較)

「滞在国のほうが精神的にゆったりしていた。ドイツはゆったりしていて余裕がある。緑や公園が多いし、それらが、大きいところが好きである。ドイツは生まれたところだから口に言い表わせれないような気持ちがある。」

(海外経験をしてよかった点)

「ドイツ語がしゃべれるようになった。ドイツを知ることができた。」

(海外経験を将来の進路にどういかしていくか)

「特に考えていない」

【教師からみた思考や行動のあり方】

・ドイツを「故郷」と言い、「帰りたい」という表現をする。「僕にとっては日本の方が外国だ」と発言したこともある。

・彼がドイツにいたことを、多くの生徒が知っていて、友人に「ジャーマン」と呼ばれていた。「べらべらしゃべるのはいただけないが、聞かれれば答える。」と言っているが、むしろドイツにいたことをまわりの人間に、積極的にアピールしている面もあり、友人にドイツ語を教えたりもしていた。また交流クラブ

(海外経験者などの話を聞いて話し合いをする課内クラブ)でドイツ滞在中の話をすることを依頼した折も「いいっすよ」と実に気軽に引き受けた。

- ・集団行動が苦手な面があり、卒業式の途中で急に席を立ったこともあった。その理由を尋ねたところ、初めはそのこと自体を忘れていたが、しばらくして思い出した。「卒業証書を渡すのがテストを返すようで味気なかった。このため、卒業式がいい加減に思えて、見るのが嫌だった。ドイツの式はもっと雰囲気があった。外の空気も吸いたかったので出た。」とのことである。

本校の卒業証書授与は一人一人に卒業証書を手渡すという丁寧な方法である。これに対して、「卒業証書を渡すのがテストを返すようで味気なかった。このため、卒業式がいい加減に思えて、見るのが嫌だった。」と表現したのには驚いた。また、このような発言を生徒から聞いたのは初めてであった。

- ・数学の時間にいないので聞いてみると図書館で哲学書（カントやヘーゲルなどのドイツ観念論）を読んでいた。授業を無断で休んだことに対してまったく悪びれた様子はない。哲学の本が読みたかったから読んでいただけだという態度である。担任が注意したが、10日後にはまた、数学を抜け出してげた箱の付近にいた。このときは「考えごとをしていた」とのことである。
- ・母親に聞いてみたところ、「幼稚園までは現地の幼稚園に通っていた。ここでは子供たちは各々好きなことをして遊んでいて、一齐に同じ遊びをすることはほとんどなかった。毎日ブロックばかりで遊ぶ子や、絵ばかり書いている子もいた。飲み物なども机の上にいつも置いてあって、飲みたい子は好きなときに勝手に飲むようになっていた。小学校へ入ってから授業中に席を立って、動き回る子もけっこういた。三つ子の魂百までではないが、この生活が彼に大きな影響を及ぼしているのではないかと思う。自分の子供時代や、同じ年令の他の子と比べて、個人主義的なところが強いように思う。」
- ・以上のことから考えて、自分が意義を感じないことがらに時間を費やすのは「時間の無駄」であると考えている傾向が感じられる。
- ・凝り性で一時期は哲学に凝り、「カント、ヘーゲルを中心に図書館にある西洋哲学の本を10冊読んだ」とのこと、友人にも“哲学”と呼ばれていた。英語の語源にも凝っていて、「テストでは絶対でないがおもしろい。大学でも勉強してみたい。」と言っていた。
- ・アンケートでは、(海外経験を将来の進路にどうかしていくか)という問いに対して「特に考えていない」と答えているが、直接聞いてみたところ、「大学でドイツ語を勉強したいのでドイツ語学科への進学も考えている。」とのことであった。その理

由は「ドイツ語は話言葉しか分からないので文を読むことはあまりできないがヒアリングはできるから、他の人よりのびるかなあと思うから」ということであった。最終的には、英米語学科へ進学した。

- ・中学3年生になる時、受験を考えて帰国した。中学時代に友人や教師などに何か嫌なことを言われたことはないかと尋ねてみたが、「ドイツにいたことについて、友達から言われたことはあったが、どうにもならないことだから、気にしなかった。」

母親は「帰国後中学校でいじめられたりすることを一番恐れていたが、すぐに友達をうまくつくり、嫌なことはあったであろうが、学校へ行くのが嫌と言ったことはなかった。」

- ・母親によると「ドイツで一番困ったのは小学校1年生の時、ずっとドイツの幼稚園でドイツ語で過ごしていたため、日本語の語彙が少なかった。当時はドイツで生まれて小学校まで進むケースは無く、他の児童は日本語ができたため、うちの子供は知能が低いのではとまで言われた。この時は本当に苦労したが、幸い好奇心旺盛な子だったので次々質問し、日本語に慣れていった。」
- ・3年生の舞台コンクールでは、脚本を書き、演出を担当した。2年生までは、一匹狼的なところがあったが、3年生になってリーダー的な役割を少しずつになるようになってきた。集団行動が苦手な2年生までは室長に選ばれるタイプではなかったが、3年後期で初めて室長に選ばれた。
- ・3年生の9月に舞台コンクールに凝ったり、「テストでは絶対でない」と本人が言っている英語の語源に興味をもったりする。推薦入試が本格的に始まりすでに合格の決まっている生徒もいて、3年生に焦りの広がりつつある中ではいかにもマイペースのように感じられた。
- ・全体的にみて、まわりの状況や拘束事項にとらわれることなくその都度興味のある事柄に没頭する傾向が非常に強い。こうした点については、本人の性格、人柄による部分も大きいであろうが、ドイツでの生活が影響を及ぼしている面もあるのではないかと考えられる。

②男子

(滞在先) インドネシア

(通っていた学校名) 日本人学校

(滞在時期) 9才から12才

(渡航理由) 父親の転勤に伴った。

(学校の授業内容)

文部省指導要領にそって、複式学級(小1、2年 小3、4年 小5、6年)

(滞在中に困ったこと)

「病気、ケガ等の処方。骨折したときには何時間もかけて病院へ行った。病をなおすのに祈祷することもあった。学力の違い。」

(外国から見た日本をどのように感じたか。)

「偉大な国である。経済的にも学識的にもそうであるが、反面、戦時中に占領されたことがあるので、インドネシアの老人にとっては、日本はいやがる国でもある。」

(海外渡航中に考えたことと実際に現地に行き違っていると思った点)

「人々の性格、現地の状態（スリが多いとか治安が悪いとか、渡航前には知人にいろいろ言われたが、思ったより過ごしやすかった。）」

(印象に残ったこと)

「屋台が家の前にあり、その店主(?)の手伝いをやっていたこと(遊び程度だが)。運転手さん、女中さんなどにかわいがってもらったこと。

- ・家庭内での役割、仕事がきまっており家族一体で生きている。日本との生活の違いがはげしい。貧富の差についておおいに悩んだ。家の近くの貧しい友達と自宅で遊ぶと“ちょっとこれ貸して”といって物を持って行ってしまい返さない。サッカーボールを持って行って返してくれなかったりした。母親と一緒に遊ぶのはいいけれど家には入れない方がよいと言った。
- ・3年目には大がかりな泥棒に入られ、トラックで7～8人できてテレビ、アイロン、ステレオなどの電気製品、日用品などをごっそりもっていかれた。ドゥクンという古い師に占ってもらったところ、盗まれたものの一部がバナナの木の下から出てきた。中には女中さんが泥棒の手引きをしていて、旅行中に家中の物をごっそりもっていかれた日本人もいた。
- ・ライ病にかかる人がけっこういて、指のない人、足のない人、鼻のない人などを市場では、けっこう見かけてショックだった。
- ・現地では、お金持ちの部類にはいり、貧しい友人などは、物を分けてもらって当然といった感じで接してきた。一部のお金持ちの人たちは鼻持ちならなくて、対等につきあえる近所の友人が見付けにくい状況だった。
- ・インドネシアの人は見知らぬ人同志でも目であいさつする。日本人は会わないように避けるのはよくない。
- ・女中さんなどは、普段とても明るくて陽気だが、貧しい家の人が多く、母親がけっこう話をきいてあげるほうだったので、話しながら泣いていることも

あった。」

(海外経験による考え方の変化)

「日本の生活は物質的に豊かであるが、働くことを忘れた人々(甘えた子供)が多い。インドネシアで働く中国人はシャキッとしていた。日本人の目はたれていて。人を見る視野が広がった。」

(海外経験を将来の進路にどう生かしていくか)

「人生のステップ。東南アジアに興味があるので、勉強していきたい。」

【教師からみた思考や行動のあり方】

- ・学級日誌にインドネシア語で所見を書いたこともあるが、一方で「インドネシアにいたことをあまりみんなに話したくない。」と言ったこともある。理由を尋ねると中学時代には“インドネシアってカレー食ってるんだろう”“インドネシアはフロがないだろう”などと、かなり友人にからかわれたとのことである。本人はインドネシアが好きなので、ばかにされると怒った。からかわれて、喧嘩もした。「本当に理解してくれる人にしか話したくない。」というのが理由であるようだ。
- ・この生徒がインドネシアに住んでいたことを公言しないのは、インドネシアの印象が悪い為かとも想像したが、まったく逆に当初予想しなかった程、非常に愛着が強いようである。この生徒のように、インドネシアが好きであるにもかかわらず公言できないということは不自然なことである。この不自然な現象は、帰国子女本人だけでは解決出来ない要素も大きい。とりわけ、中学校などでは、特に発展途上国と呼ばれている地域から帰国した生徒が、海外滞在を隠すことなく素直に言えるようになるためには、学級・学校、さらには社会全体の意識の変革が必要である。
- ・交流クラブでインドネシアの話をしてくれるよう交渉したところ、ずっと渋っていたが、クラブが少数人数であることを伝えて、半年がかりで説得したところ、引き受けた。日本とはかなり文化が異なるため生徒はとても興味深く聞き、質問も一番多くでた。
- ・これを機に、なにかふっきれたような感じで、インドネシアの話で以前より気負わない態度でするようになった。しだいに、「話をしていると、ほのほのと懐かしい」と言うようになり、中学時代からかわれた影響が、かなり薄れてきているように思われる。今後大学では、この経験を前述①の生徒のように、アピールするようになるのではないかと期待している。

③女子

(滞在先) アメリカ

(滞在時期) 高1の6月から高2の6月

(渡航理由) 留学

(渡航方法) ILS

(動機・きっかけ) 「短期留学で一度行き、長期でも行ってみたいと思った。」

(目的) 「英語力をつけるため。他国の生活を、あじわってみたい。」

(学校の授業内容)

「数学、英語、生物、社会(アメリカ史)、読み(Reading)、歌」

(印象に残ったこと)

学校生活：いい人達にめぐりあう事ができた。友達ができるか心配でしたが、学校が始まってすぐのできだったので、とてもホットした思い出がある。

とにかく、みんな楽しそうだった。1時間1時間ごとの教室移動で友達と、顔をあわせたりすると、あいさつしたり、しゃべったりしていた。かねがなる1分前ぐらいになると、ダッシュで教室に走っていく子が多く、かねがなると先生の話が途中で、すぐみんな教室から出るので、そのスピードについていくまでがたいへんだったが、全部新鮮で私も学校生活が楽しめた。」

家庭生活：「親は、子供を自由にしてるんだけどその中でも、子供が間違っている事をしていれば、すぐに厳しくしかるし、自分の意見も言ってる所がすごく印象に残った。子供も親の手伝いをよくしていた。」

生活全般：「アメリカのほうが子供の意見を尊重している親は多いと思う。禁煙運動がさかんで、ティーンエイジャーはあまり関心はなかったようだが大人は関心をもっていた。学校のけんかは、すごく多くてびっくりした。自分の思っている事をその場で全部言ってしまう性格には理解できないものがあったが、それもその国の人々の持つ物だからとがまんした。とてもにぎやかに、人を集めてパーティーをひらく。クリスマスにも教会に行き、あの雰囲気はとても印象的だった。」

(滞在中に困ったこと)

「あまり困った事はなかったが、電話で友達としゃべる時などは、ボディランゲージが使えないので好きではなかった。」

(外国から見た日本をどのように感じたか。)

「“住みよい場所だと思った。”理由は、17年間住んでいるから言葉も不自由しないし、知りつくしている友達もいるから……でも英語が完璧になったら、アメリカも夢中になれる国だと思う。」

(日本と滞在国の比較)

「勉強の面では、高校までが日本はすばらしいと思

うが、大学では遊んでしまうし、アメリカは日本より高校までは劣るが大学ではすごいと思う。

どちらもどっちだと思うが、イロイロな運動をアメリカではとりあげていて、例えば、エイズ、避妊、禁煙などさかんな所だと思う。」

(海外経験をしてよかった点)

「いろいろ日本ではできない体験ができたし、アメリカのすごくやさしいホストにもめぐりあえた。」

(海外経験による考え方の変化)

「もっといろんな所に、目を向けて行きたいと思った。1つの所にいるより、いろいろな人の考え方を知り、学んでいきたいと思った。」

(海外経験を将来の進路にどうかしていか) 「留学を生かせたら良いと思うが、今以上に英語の勉強をしなければ本当に生かしては働けないと思うので、これからの努力しただと思う。」

【教師からみた思考や行動のあり方】

- ・本校で初めての事例として、休学をしないで留学した。
- ・帰国後、留学はどうだったか聞かれると、「楽しかった！」と嬉しそうに答えていたのが印象的であった。彼女の場合“為になる”とか、“勉強になる”ということより、“楽しい”か“楽しくない”かを優先するという傾向が強い。
- ・帰国後は髪を派手にチリチリにしピアスをして現われ同学年のみならず、他学年の目も引いた。留学前から髪の色や服装にこだわる傾向があったが、その傾向が一層強くなった。留学前には1年生であったこともありみられなかったが、帰国後は学校でよくガムをかんでいた。
- ・明るく社交的であるが、学校の勉強に対する学習意欲はあまり高くない。

将来は「大きい会社のOLになりたい」とのことでもまだあまり本格的に進路を考えていないが、アメリカ州立大学の日本校に進学した。

- ・留学により英語による会話には慣れたが、会話力以外の英語力はあまり向上しなかった。“留学したのに英語のテストが芳しくない”とある教師に言われたことなどをきっかけとして高2の一時期、登校しながらない傾向がみられ、月曜日の欠席、遅刻が目立った。学校に来たくない理由として「学校生活がアメリカのように刺激的でない。楽しくないし、おもしろくない。仲の良い友達はあるが、ほとんど中学校から一緒に新鮮さがない。」ことをあげた。

- ・半年違いで留学していた後述する④の生徒(英語の力がずば抜けている)と比較されたりしたことは、特におもしろくなかったようである。留学をすると

まわりの生徒や教師から、英語力の向上など留学による“目に見えるような効果”を期待される面があるので、これも彼女にとっては不満であったのではないかと考えられる。留学に関する話を公の場で、あまり話したがるらないのも上記のようなことが関係しているものと思われる。交流クラブ（海外経験者などの話を聞いて話し合いをする課内クラブ）で話をしてくれるよう交渉したが、引き受けなかった。

- ・3年生では、遅刻は多いものの、元気に登校した。学校がおもしろくない、という不満はまだあるようだが、高校生活を改善していこうとするより、大学進学まで我慢しようという感じで「あと少しだし、がんばって学校来ます。」と言っていた。
- ・また、留学前から、その場その場を楽しく過ごしたい、という傾向があったが、帰国後、その傾向がより強くなった。アメリカ滞在中に、各種のパーティーによく参加して楽しんだことによる影響も考えられる。

④男子

(滞在先) オーストラリア

(滞在時期) 高2の1月から1年間休学して留学

(渡航理由) 留学

(渡航方法) AFS、盛田国際振興財団

(動機・きっかけ)

「他国の文化や考え方などに興味があった。学校の掲示のAFSのポスターを見て応募した。」

(目的) 「他国の生活文化の習得、理解」

(学校の授業内容)

「5科目選択（数学Ⅰ、数学Ⅱ、物理、化学、英語）理科系の科目（物理、化学）は実験重視。英語は討論、演劇、ビデオ観賞など内容が多彩。」

(印象に残ったこと)

学校生活：「最初、英語が話せないうちは、自分のことをよくわかってもらえないので友達ができにくかったが、授業や、クラブ、その他の活動を通して徐々に友だちが増えていった。学校は“勉強”をし、“技術”を習得する場ということが徹底している。生活習慣などは、家庭で行うものだという事らしい。（だから校則は少ない）高3用の自習室があって、飲み食いしても何してもよいという生徒自治の部屋が必ず学校にあったのはよかった。」

家庭生活：「“話し合う”ことが重視されている。親と子が話し合うことによって主張を妥協していったりする。そのためには何度でも話し合い、お互いが納得するまで話し合うようだ。」

羊の毛を刈らせてもらったり、銃をうたせてもらったこと。」

全般について：「町並みや、家庭での日本との違い。土地の広さ。農業のすばらしさ。」

人のあたたかさ、人のつめたさ。ことばのむずかしさ、相互理解のむずかしさ。そして相互理解のすばらしさ。」

(滞在中に困ったこと)

「渡航直後、英語に慣れていないため、言語能力が一時低下し、かつまた、オーストラリアの生活習慣が身についてない。このことから、子供のようになってしまった。だから、当然、周囲は僕を子供扱いにした。これが一番悔しかった。」

(海外渡航前に考えたことと実際に現地に行き違っていると思った点)

「英語のなまり。オーストラリアはアメリカと同じだろうと思っていたが実はヨーロッパ的な要素が強かった。」

(外国から見た日本をどのように感じたか。)

「働きすぎである。企業や団体の帰属心は強く、個人の自由より集団の目的達成を重んじている。過激な競争世界である。経済的には大国であるというイメージでオーストラリア人は一致している。」

(日本と滞在国の比較)

「経済的、物質的には日本が豊かであろうが、精神的や基本的な衣・食・住の環境はオーストラリアの方が豊か。」

(海外経験をしてよかった点)

「違った視点で物事をみられるようになった点。英語、国語、社会などの学習に役にたった。」

(海外経験による考え方の変化)

「僕が世界や物事を考えるときに、日本の思考方法で無意識に考えてしまうので、いろいろな立場に立って考えた方がよいと思うようになった。人間性の共通点や相違点について実際に認識できた。」

(海外経験を将来の進路にどういかしていくか)

「今後の国際社会のなかで日本の役割が大きくなっていくことは明らかである。よく国際理解は“give and take”が必要といわれるが、今までは僕は“take”することが多かったから、これからは“give”を重視して行動するようにしたい。」

【教師からみた思考や行動のあり方】

- ・高校入学時より学習習慣が身につけており（一日に5～6時間勉強する）、地道な努力ができる。毎日遅くまで勉強しており、朝のS・Tの遅刻が多い。
- ・文化委員の仕事などで帰宅が遅い頃は睡眠時間を削って勉強したので、一時期は青い顔をして疲れのため湿疹ができたりしていた。
- ・研究旅行のときには、最初にカラオケを歌い場を盛り上げるなど、くだけた面も見られる。また、研究

旅行のグループ分けでは行動に問題のある生徒と一緒にになり、彼が参謀となって、夜中に部屋を抜け出したりした。他にもまじめなリーダーはいたが、問題行動のある生徒もまとめることのできる生徒はクラスで一人だった。

- ・学年の中では、学力的にずばぬけて優れている。学力面での競争相手はいない。このこともあり、授業中は自分で持ってきた問題集を解いたり、眠ったりしていることが多い。
- ・進級すると帰国してすぐ、センターテストがあり、受験の準備ができない。浪人するよりは、留年したほうがよい、とのことで休学して留学した。
- ・渡航前の2年生時には、文化委員長に立候補して学校の活動にも積極的に参加した。帰国後は目立った役員活動はしなかったが、3年生後期は、室長に選ばれた。
- ・学年合同ホームルームのうちに、学校祭の舞台コンクールを3クラス合同で行う企画を実行委員が発表し、他の生徒が意見を述べず、決定しそうな雰囲気なかで「合同で行うと舞台装置が共有できるという利点はあるが、肝心のクラスの団結をする機会が減る。高3で忙しいと言うけれど今までの高3もしてきたのだからできると思う。舞台コンクールはクラスごとにした方がよい。」と発言した。これによって流れが変わり、結局クラスごとに企画することに決定した。このようなクラス企画に前向きな発言をする一方で、趣味の調査したときには「趣味はない。旧帝大をねらう者は趣味を持つことは許されない。」と解答した。
- ・自分なりの考え方を持っているが、思い込みが激しく、極端な面があり、一度決心すると他の人の意見を聞こうとしない面もある。
- ・休学して留学したため、他の生徒より1才年長であり、理論的な発言、学力等から生徒間では“先輩”と呼ばれ尊敬されていた。
- ・留学に関する話を他の生徒にクラスのホームルーム、図書委員主催の文化講座、交流クラブなどで気軽に話した。
- ・（滞在中に困ったこと）というアンケートの項目に対して、「渡航直後、英語に慣れていないため、言語能力が一時低下し、かつまた、オーストラリアの生活習慣が身につけてない。このことから、子供のようになってしまった。だから、当然、周囲は僕を子供扱いにした。これが一番悔しかった。」と答えているようにプライドが高い。このことが、困難を乗り越える原動力になっている反面、異文化の吸収の障害になっている部分もあるように感じられる。かえって、後述した⑤の生徒のような場合の方が、

異文化に素直に接している面もある。

⑤女子（留学中に調査を行った。）

（滞在先）オーストラリア

（滞在時期）高2の12月から高3の12月まで

（渡航方法）ILS、ASSE

（渡航理由）留学

（動機・きっかけ）

「高校1年生の夏にホームステイをして、オーストラリアの高校を見学させてもらった時、日本の高校とのちがいにびっくりして、自分もその学校で本気で勉強してみたいと思ったため。」

（目的）「語学研修。他の国の文化の違いに自分の体で触れてみたい。友達をたくさんつくる。日本の文化、習慣を教えてあげたい。」

（学校の授業内容）

「演劇、芸術、コンピューター、英語、家庭科、応用コミュニケーション」

（印象に残ったこと）

学校生活：「日本と大きく相違してるなと思った事はこっちの学生は自分の意見をはっきりともっていて授業中に、先生の言っている事がまちがっているとせば、はずかしがらずに最後まで自分の意見を通す、だから授業中はけっして静かではない。日本の授業は講義の様なものです。

・友達はみなとても親切です。日本に他の国からの留学生が来たなら、こんな事ができるかしら？と思うぐらいです。時にはほっといてほしいというくらいおせっかいな人もいたりしますが、それがこっちの人の親切なところなのでしょう。とてもあたたかいです。

・とにかく先生と生徒の間に壁がない。勉強以外の私生活の話や、悩みなどを友達だけでなく先生に話す子もたくさんいます。これはとてもいい傾向だと思います。どうしたら日本もそうなるだろうとよく考えてみますが、基本的に教師の作っているムードが日本とオーストラリアとでは違うのではないかと思います。

・日本の様に先輩、後輩関係など全くなく、みな、さっぱりとしています。気に入らない事があれば、直接その気持ちを相手にぶつけるため、その時はケンカになりますが、その後は全く後くされがないところがいいところ。日本の学生（特に女子学生）も見習うべし!!

↓線部の具体的な例をあげてくださいという質問への解答

・何でもすぐケンカになります。ほんの小さい事…
…例えば、友達の間では食物を買う列に横入りした

とか。そんな、私が12~13歳頃卒業したような内容でもうケンカ。とにかくものをはっきり言うがそれでおしまい。次の日と言わず一分後には仲なおりです。大人の間でもそのようです。私の最初の Host のママと私のカウンセラーさんがケンカをしたのですが、言いたいだけ言い合って、とても見苦しいなと思いましたが、自分を飾って言葉を考えながら言うより、地位も名誉も捨てて言い合う方が自然ではないでしょうか。ただ、それになれるまではとても悲しい思いもしました。

- ・若者は大人びているが変に子供っぽい。とりあえず見た目は大人っぽい。わたしが17歳と言うと驚いて“あなたはどう見ても12歳にしか見えない。”と言われてしまう。しかしやはり考え方や、楽しみ方は日本の高校生と同じかそれよりも下かもしれないと思う。
- ・物事をとても安易に考えているし、大人の意見にさからってみたい……よく言えば自立していると言うことだろうが……公園などに行けば、日本だったらせいぜい小学生のガキくらいしか乗らないような乗り物にのって本気で楽しんだりするから大笑いです。とにかく、見かけと中身のギャップにとまどいます。」

家庭生活：「家庭にもよるでしょうが、私の見るかぎり、こっちの子は親の手伝いをよくする。自分の部屋をいつもきれいにしていると思う。そういう面では親孝行。

- ・驚いたことに、家事、つまり、食事の用意、かたづけ、掃除、洗濯、又は赤ちゃんのおしめかえ、すべて男の人も平等にします。
- ・こっちの人はねるのが早い。大人の人でも9時前にベッドに行ってしまう時があるからはじめおどろいちゃいました。」

全般について：「日本と違って、女性が仕事を持つ事にたいへん理解があるし、また、多くの女性が男性と肩を並べて働いている。何事にも男女平等であると感じる。

- ・こっちの人はみなとても若くして結婚します。それが、そもそも、まちがいのもとと私はにらんでいますが、とにかく離婚が多い。又、バカなオーストラリアのシステムでその様な人々に多額のお金がかかるのです。へたすれば、まじめに働くよりも離婚した方が、お金ははいる、というくらい……だから離婚して他の男性、又は女性と一諸に、結婚しないで暮らしている人がたいへん多い。これはまちがっていると思う。子供達がかawaiiそうです。
- ・こっちに来て初めて黒人差別に触れる事ができました。はじめは白人が黒人を嫌う理由が分からず、た

だ、肌の色の違いだけで人々は差別をおこしているのかなと思ってとてもいこうを感じましたが、今ではそうでない事を知ったため、とてもとても深刻な問題だと思います。

- ・Gladstone という街は私が思うに他より Aborigine が多いように感じます。(Aborigine とはオーストラリアに最初に住みついた黒肌の原住民) 黒人の人達の多くは職を持たずに国から受けとるお金で、毎日をダラダラと暮らしています。家族関係もめっちゃくちゃで、自分の父親が誰なのか正確に知らないというかわいそうな子供があふれています。毎晩お酒に酔って他の人からんだり、白人女性を暴行するというような事件は新聞で毎日の様に見かけます。とにかく、白人と黒人の壁がどうしたらこわれるのかは考えても考えても答えはなかなかできません。
- ・オーストラリアの政治、経済ははっきり言って間違っていると思う。今すぐに改革すべきである。その1・・・16歳以上で仕事をもたない者にかなりのお金が渡る事。それもへたすればまじめに働くよりもお金が入るというぐらいだそうです。その2・・・政府は離婚した夫婦にも多額の金をあてている。そのため夫と別れて他の男性と又は妻と別れて他の女性と一緒に住むという形がこっちはたいへん多い。離婚問題はかなり深刻。その3・・・日本では20歳以上だが、オーストラリアでは16歳以上から酒、タバコ、がOK。ついでに親の承諾なしで結婚ができる。これはぜったいに間違っています。」(原文のまま)

(滞在中に困ったこと)

「やっぱり病気。

自分の症状を英語で言うのがひと苦勞。病気の時にはやっぱり、さっぱりしたおかゆやうどんが食べたい気分なのに、スプライトとドーナツを出された時は、おどろいた。病気になるとうmesich になる。」

(迷ったり、悩んだりすること)

「今でもしょっちゅう涙を流します。それにはいろいろな理由がありますが、まずやはり英語についてです。もうこっちに来て9ヶ月以上たっているのにどうしてこんなに英語がしゃべれないだらう？毎日勉強しているのに本当に身に入っているのかしら？と自分の英語力にたいへん自信をなくす瞬間というのがあって、そんな時はいつも私が世界中で一番バカだと感じて泣いたりします。

- ・あとは人間関係についてよく悩みます。これは誰もどうする事のできない問題なのですが、私がいい人だと認めてても、彼らの英語を100%理解できて彼らの行動や考え方が理解できないことがたまにあります。これがまさに国のちがいが。最近はその考え

て自分をおちつかせます。」

(外国から見た日本をどのように感じたか。)

「異常に人口の多い混んだ街。日本人は勉強のしすぎ、働きすぎ、とにかく忙しすぎる。でもまちがっているとは思わない。

とにかく日本は忙しくせかせかした国である。いつも何かしてて決して止まっている時がない。こちらの人はもっとのんびりしています。

- ・日本人は時間に正確だなと思う。約束もよく守ると思う。つまり自分の言った事に責任をもつ。
- ・車、電化製品に日本製がたいへん多い。つまり科学技術では世界一。
- ・教育システムも異常に激しいが、それは決して間違っているわけではない。すべてが正しいとも思わないが、ゆるすぎるよりはいいと思う。自由が多すぎると自由を自由と感じなくなってしまうから。」

(海外経験による考え方の変化)

「まず、物事に対する判断力がついた。

私が思うにオーストラリアの人は大きな選択を最終的に自分自身で決めます。親が子供の進路などについてあたえるものはアドバイスだけです。私が自分の選択を友達や Host に相談したときもはっきり“私はあなたに意見をあたえるけれども決してあしろうしろとは言えない。あなたは自分で決めなければならない。”と言われました。確かにそうだと思います。日本の一部の親は子供に判断を与えず、親の勝手に子供の将来を決めてしまう人がいるように思います。私も人の意見を取り入れながら、最終的に自分で判断する事ができるようになったと思います。

- ・以前の私はとても神経質な一面を持っていて、小さな事でいつまでも悩んだりしていたけれども、こちらに来て、いつまでも悩んでいても道はひらけないと言うことを知ったため、最近、ひらき直って、事を明るく見れる様になった。きっと明日はいい事があるだろうと信じて……」

(海外経験を将来の進路にどういかしていくか)

「まだはっきりとはきまっていないが、やはり、この1年の体験を生かした職業につきたい。やはり英語を生かせる職につきたい。今のところ、スチュワーデスになりたいと言うのが私の夢ですが……」

【教師からみた思考や行動のあり方】

- ・「進級を強く希望。1年間のブランクを取り戻す努力をする気迫は十分にある。ひとつ下の学年と一緒にやっけていけそうにない。同じ学年と一緒に卒業したい」と留学前に書いている。
- ・中学時代は女の子同志のグループ間のもめごとなどで“むかつく”などと必死になることもあった。中

学2年生のときには仲間とともに1年生の女子と派手な言い合いをしたこともある。

その生徒が、「(オーストラリアでは) その時はケンカになりますが、その後は全く後くされがないところがいいところ。日本の学生(特に女学生)も見習うべし!!」と書いているところが興味深い。

- ・現地からの報告書(3ヶ月に一度を義務づけている)にも成長のようすが十分うかがえる。本人も述べているように何より、判断力が身についたようである。初めの4ヶ月あまりを過ごしたホストファミリーには4人の子供がいて、部屋も9才の子供と共同で勉強の時間がとれないとずっと嘆いていた。「本来、ホストファミリーの条件にベビーシッターがわりにしないことや、1人部屋があることが入っていたのに、それとは違っている」と文句を言いながらも、ホストチェンジをできないでいた。そうしたこともあって、留学して3ヵ月後に胃をこわし、まったく食べられず血尿がでるなどで一週間程寝こんだ。かなり精神的にも参っていたようである。今となっては、この件に関して真剣に考えたことが成長の大きな要因になっている部分もある。今まで自分で大きな事柄を決めることのなかった彼女にはよい経験であったようだ。決断までに時間はかかったが、その後、自分の判断で、ホストファミリーのチェンジを行った。
- ・留学前には黒人差別の問題にまったく無関心であったが、手紙や報告書で何度も書いており、かなり関心が深い。友人の家で開いたパーティーに、肌の黒い友人を招いたところ、家の中に入ろうとしなかった。彼ら自身、差別されていることを十分知っているかと思うと、とてもショックだったとのことである。初めのうち彼らの開くパーティーに喜んで出ていたところ、まわりから行かない方がよいと言われたことにもかなり衝撃を受けたようである。
- ・こちらの質問に対する答えは、全体に具体的で、感じたことをそのまま書いており、留学によって接したいろいろな事柄を、新鮮に受けとめていることが、伝わってくる。この資料を読んで“こんなに書けるようになったのか”と驚いていた教師も多い。あまり身構えることなく、素直な感覚で、異文化に接したことが、この成長につながったのではないかと考えられる。

【おわりに】

この事例研究においては、海外滞在経験者の中でもよく知っている生徒を選んで行った。日頃の状況知らない生徒では考察しにくいからである。①、②、④の生徒は高校2年、3年と担任学年であったので行事

などを通して行動様式を知っていた生徒である。③、⑤の生徒については、高校2年、3年生のみでなく中学1年生から3年生まで担任学年であった。

また、調査方法としては、まずいくつかの項目についてアンケート調査を行ったうえで一人ずつ質問をした。さらに、なるべく多くの教師にこれらの生徒に対する考察などを聞くとともに、生徒の親にも情報を提供してもらい、考察の判断材料とした。

これらの事例研究をパターン化したり、まとめることは困難であり、危険である。アメリカに滞在したから英語のテストがよくできるはずであるとか、留学したから大きく成長したはずであるとか固定的な発想で生徒に接すると生徒を理解できない。まず、生徒の思考や行動をよく観察し、柔軟な発想で対応していかねばならない。そして、今後、生徒の思考や行動の原因となっている部分を理解する過程で、ここにとりあげたような事例研究が役立つのではないかと思う。たとえば、①の男子生徒のように、授業を勝手に休むとい

うような事柄に対して、怠けて休む生徒と同じように注意をしても事態は改善されない。③の女子生徒についてみられるような、遅刻、欠席も単に注意しているだけでは、一時的にはなおってもまた同じようなことが起こる。かなり時間をかけて、話を聞いて原因となっていることを考えていかねば根本的な解決にはならない。

調査を行った留学体験者4名のなかで2名は、留学先への適応よりも帰国後の日本の学校体制への適応の方が難しかったようである。

今後も高校生の留学体験者や帰国子女は増えていくものと思われるが、正直に言って、対応しきれないのではないかと懸念される。1クラス45名もの生徒の抱える問題点は多様化しつつあるうえに絶えず変化しており、担任だけでは理解できない点も多い。これからも、このような生徒の抱える問題点を探るとともに、彼らに対応できるカウンセリングなどのシステムを充実せねばならないと考えている。